



藤並の森



リレー随筆

薔薇と清岡卓行

岩阪恵子



バラの前で秀哉さんを抱く清岡卓行

薔薇と清岡卓行にまつわるなにかを書こうとして、すぐに頭に浮かぶのは、『薔薇ぐるい』という彼の長編小説だろう。清岡には薔薇を書いた詩もあるが、この小説のタイトルはなんととっても圧倒的である。

初めて新聞の連載小説を頼まれたとき、以前から薔薇を主要なモチーフのひとつにする小説を書きたいと考えていた清岡は、そのタイトルも「薔薇ぐるい」と決めていたので、これでいこうと思つたのちに記している。なぜ薔薇なのか。その

根底には、自宅の庭で丹精こめてバラの栽培をした五、六年間にわたる自身の経験があつたと思われる。じつさい生きもの（動物であれ、植物であれ）を育てるというのはやってみなければわからないもので、苦勞の連続ともいえるし、驚きと愉しみの宝庫ともいえるものだからだ。

東京の二三区内から埼玉県にちかい多摩地方に引っ越してきたとき、褐色がかつた粘土質の土がむき出しになつた小さな庭を見て、そこに緑をと思つたのはごく自然な願ひだつたらう。翌年の春、清岡といつしよに新宿へ出た帰り、西武新宿の駅前でバラの苗がたくさん売られていたのを見つけ、これはこれは、という感じでさっそく二人で物色をはじめた。新苗、大苗ともに美しく咲いた花の写真が表に、栽培方法が裏に印刷されたラベルが枝につけられており、両手に一本ずつ提げて帰ろうと四本の苗を選んだ。蔓薔薇の

スはなかでもつともよく育ち、ピンクの覆輪の入る淡いクリームがかつた黄の大輪の花をあふれるほど咲かせた。清岡は薔薇栽培にかんする本を読み、スコップや土や肥料といったものを次から次へ買い求め、もちろん苗も買ひ足していき、あつというまに庭の大半は薔薇で占められていくことになつたのである。

小説のなかには栽培中の苦勞や喜びがさまざまなかたちで挿入されているが、薔薇の美しさ、儂さ、勁さが読者により深く印象づけられるのは、選ばれた古今東西の薔薇の詩がそれぞれの情景のもとに適切に配置されているせいもあるだろう。主人公の男はこうも言っていた。薔薇が美しいのは花ばかりではない。根本からあらわれる太いシュート（新梢）の勢いも、冬の剪定された樹形の静かな緊張感も劣らず美しいと。そういうえば「冬の薔薇」と題された清岡の詩があつた。その一節はつぎのようなものである。

しだいに小さな 棘だらけの
裸になつて行くにつれ
逆に 新しい力が
どこからか溢れてくる
冬の薔薇の ふしぎな姿。

(作家)

ピース、黒薔薇のパパメイヤンの二つははつきり覚えていたが、あとの二つは黄の天津乙女だつたか白のホワイトクリスマスだったかそれとも他のなにかだつたか今はい出しせない。蔓のピー



清岡卓行『薔薇ぐるい』新潮社刊 ※版元品切れ



寅彦の押し花帳

レポート

展示の様子

花を愛する人の物語

～ My Secret Garden ～

庭の再生と子どもたちの癒しと成長の物語、フランシス・H・バーネットの『秘密の花園』の世界と、そこに出て来た花々の原産地やゆかりの国の文学作品をご紹介する「花を愛する人の物語 My Secret Garden」。

『秘密の花園』の壁をイメージした入口や、造花やペーパーフラワーアートで花いっぱい展示室内は皆さまから大変好評をいただいています。入口でそっと見守るコマドリには気づいていただいたでしょうか。

展示室内は3つのコーナーで構成。『秘密の花園』の世界』では、絵本研究家の安田幸子氏所蔵の1938年版の『The Secret Garden』の原書や、大正7年に日本で初訳された岩下小葉の『秘密の花園』など貴重な資料を展示し、さらにピエール・ジョゼフ・ルドゥーテの『薔薇図譜』をはじめとする19世紀の植物画の数々で『秘密の花園』に出て来る花々をご紹介します。

「花たちのふるさと」世界で芽吹く花の物語』では、東欧に春を告げるスノードロップ、ヒマラヤに咲くしゃくなげ、りんごの里カザフスタンなど、花をきっかけに世界の文学作品に触れていただける内容になっています。視覚的にも楽しんでいただ

こうと、ジャイアント・フラワーアーティストの福田紗由美氏によるペーパーフラワーアートの花びらに各国の詩作品を印字。花と文学のコラボレーションをじっくりと楽しむお客様の姿が見られました。このコーナーでは片山敏彦や上田秋夫など高知県出身作家の翻訳作品もご紹介しています。

「花と暮らす My Secret Garden」では、ヘルマン・ヘッセやカレル・チャペック、高知県出身の作家清岡卓行など古今東西の園芸好きで知られる文学者をご紹介します。寺田寅彦がドイツへの留学途上に買い求めた押し花帳の展示では、100年以上朽ちることなく美しさを保った押し花を前にお客様から感嘆の声が上がっていました。

関連イベントの「押し花トリボンのブックメーカーづくり」では小さな枠の中に、色とりどりの押し花を閉じ込め、思い思いの作品づくりにより、皆さん、時間を忘れて没頭していました。

「花を愛する人の物語」展は6月12日(日)まで。ぜひ、花々と世界の文学作品に触れに文学館にお越しください。

(学芸課／岡本美和)

おしりたんてい

～ぶんがくかんのぶんたんじけん～

会期 令和4(2022)年7月2日(土)～9月4日(日)
午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)



高知県立文学館ではあらゆる世代に文学の魅力をお届けすることを願い、毎年、夏休み期間に親子で楽しく観覧できる企画展を開催しています。

今年は、大人気の「おしりたんてい」シリーズの魅力をご紹介します。



左：「おしりたんていファイル(1) むらさきふじんのあんごうじけん」
右：絵本「おしりたんてい」/いづれもポプラ社刊

■おしりたんていの魅力

「おしりたんてい」はシリーズ累計発行部数900万部(2022年5月時点)を超える大人気児童書。見た目はおしりでも推理はエクセレントな名探偵「おしりたんてい」が、数々の難事件をプアツと解決していく謎解き物語です。

本作には、キャラクターのインパクト、犯人を追い詰める必殺技、決めゼリフといった魅力ある構成のほか、メインストーリーと関係なく進行するサイドストーリーなど、随所に読者を楽ませる仕掛けが盛り込まれています。

作品の土台には「最初に提示された謎を、理論によって探求する」という探偵作品のセオリーがしっかりと息づいており、3歳から楽しめる絵本シリーズ、小学校低学年から楽しめる読み物シリーズの他、アニメ・映画・ミュージカルなど様々なメディアミックス展開も加わり、深い味わいや思わぬ発見を感じさせる作品として子どもから大人まで多くの読者に愛され続けています。

当館では、この原作の持つ魅力に独自のアプローチを加え「本と友達になつて遊ぶ楽しさ」を味わえる展覧会を目指して開催いたします。

■おぼえて・しらべて・りかいする

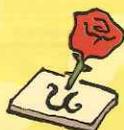
「おしりたんてい」は作中で「すいりのためのか条」として「おぼえて」「しらべて」「りかいする」という言葉を紹介しています。

なんでも覚えておくと変化に気がつきやすくなる、現場を隅から隅まで調べると些細なことも重要な手掛かりになる、覚えたり調べたことをきちんと理解する。これらは物語のなかだけではなく、日常を生きる私たちにとっても大事にしたい言葉です。

展示ではこの3か条をふまえ、まちがい探し、暗号解読コーナー、3個のおしりをさがせ!床に書かれた正しい道をたどれ!など、考え、探し、見つけ、伝える体験型の要素を盛り込みました。

当館オリジナルストーリーで展開する展示構成となっていますので、物語の登場人物になったつもりで展示を楽しんでいただき「発見する喜び」「共感する心」「わくわくする気持ち」を感じていただければ幸いです。

(学芸課/福富陽子)



※新型コロナウイルスの感染拡大状況によって展覧会及びイベントは内容変更または中止となる場合がございます。最新情報は文学館HP等でご確認ください。

旅と文学展 報告

コロナ禍のために外出もままならず、旅への欲求が高まる、そんな時期に開催した「旅と文学展」。3月27日に無事閉幕となりました。

今回は本との出会いが旅への入口にもなるというメッセージのもと、館所蔵の資料を中心として展示を構成しました。高浜虚子が雑誌の題字を記した揮毫軸「龍巻」や吉井勇の草稿「相聞居日記抄―わが土佐日記―」、市原麟一郎の取材メモなど、なかなか普段は展示できない貴重な資料を公開することができ

き、ファンの方にも喜んでいただけました。また県外作家が高知を描いた「旅のミステリー」特集、旅先に持っていきたい本を皆さんに問いかけるコーナーなど、普段と少し違う目線で作った展示も好評でした。

展示期間中、ご紹介していた作家の西村京太郎氏、西村賢太氏の訃報が相次いで舞い込み、急遽追悼コーナーを設置するなど思いがけないこともありましたが、10代からご高齢の方まで、幅広い年代のお客様がゆっくりと時間をかけて観覧してくださったのが印象的です。

クイズイベントでは、参加者の方に高知の作家の旅の名言しおりをお渡ししたところ、どなたにも大変喜んでいただき、作家の言葉の力を改めて感じたことでした。また、工作イベントのポップアップカードづくりは、参加者は少なかつたものの、見知らぬ人同士が作品を褒め合ったり、興味を持った方が持ち帰ってもう一枚、2枚と作ったりなど、満足度の高いイベントになったと思います。

「旅と文学展」は終わりましたが、本を開けばいつでも自由に旅を楽しむことができます。企画展をきっかけに、今後も気軽に文学の旅を楽しんでいただければ、何より嬉しく思います。

(学芸課／川島禎子)



恒草ばかりしてきた。いまでもよそ見ばかりしている。

濱口

たかお

喬夫展

レポート

今年の3月、濱口竜介監督が、村上春樹原作の「ドライブ・マイ・カー」で第94回米アカデミー賞の国際長編映画賞を受賞しました。濱口監督は、高知市二葉町に住んでいた洋画家・教育者である祖父・濱口喬夫（1908～1995）の家にたびたび訪れるなど、高知にもゆかりのある人です。

当館では、このたびの濱口監督の受賞を記念し、油彩・水彩等合わせて14点所蔵している濱口喬夫の絵画を中心に、4月23日（土）～5月8日（日）の間、寺田寅彦記念室の一面で特別に展示を行いました。

喬夫は自然を愛し、人柄にも似た端正な画風で知られます。その叔母・寛子は寺田寅彦の二番目の妻であったため、寺田家に入りして寅彦とバイオリンやチェロの合奏をし、絵画論を交わすなど大きな影響を受けたそうです。

展示では、春の山道の新緑と木洩れ日が気持ちよく描かれた「伊吹山への



道（油彩）などの風景画のほか、生死の境をさまよう苦しい戦争体験にちなむ絵「英軍の俘虜収容所の炊事場」（1946 スケッチ）、かつて出征したミャンマーを再訪し仏塔（パゴダ）を描いた「シエダゴンパゴダ」（1985 水彩）、喬夫の父で寛子の兄となる昶二郎を描いた「父の肖像」（油彩）など、すべての所蔵品を出陳しました。いずれも対象の美しさが素直に表現され、自然を観察してその魂を捉えようとする寅彦の自然観とも重なるように感じます。

戦後の高知県の美術教育に携わり、県立須崎佐川、西、追手前高校、私立の土佐女子高校で教壇に立った方でもあり、懐かしく思い出を語ってくださいました方もおられました。

短い期間でしたが、ご覧になる方のそれぞれの思いを重ねていただけた展示となりました。

(学芸課／川島禎子)

独仏文学の翻訳者・詩人・歌人 片山敏彦のこと

谷 是たかし

高知市・日曜市が立つ追手筋。その北側にある高知天理教会の家地。塀の際に亭々とそびえる数本の「花梨」の木がある。私はその下を通るたびに、片山敏彦を憶い出す。

「これはかりんの樹だ。／私が生れない前から私の家のある一本のかりんの樹だ。／春には淡桃色の貝殻のような華奢な花々を明るくエメラルド色の葉の間にちりばめ／夏から秋へかけて大きい金色の、でこぼこのある堅い果実を枝に垂らすかりんの樹だ。」

これは敏彦の「母」に詠まれた詩である。この地は父徳治(安芸郡田奈半利村出身)が呼吸器科専門の病院を営んでいた場所、敏彦は「稚いときから特別な愛」を持っていた樹だ。

彼は県立第一中学校(今の県立追手前高校)から岡山第六高等学校に進むが、その頃から雑誌「白樺」などの影響を受け、ドイツ文学に感動。

詩人、歌人として、文学の道に進もうとした。医者になりたい徳治は患者であった寺田寅彦に相談したが「本人の好む道」というアドバイスを得たという。ついに東京大学ドイツ文学科を卒業。法政大学教授、独仏文学



片山敏彦の墓(昭和36年10月11日没63歳) 碑の東面に「宇宙の顔がわが心にある」と刻まれている。(高知市西久万・父徳治の墓裏側、医師楠の墓の北地)

研究に専念。フランスに留学し、ロマン・ロランの訳者・研究などで没頭する。かたわら絵を楽しむ、すぐれた芸術家であった。当時、日本的なヨーロッパ文化の導入者で、多くの翻訳を著作。幅広く音楽、絵画の評論まででがけ、土佐でも幾多の講演や大学での集中講義などを通して、広く啓蒙に尽した。当時抜きん出た知識人で「僕はきつと、今に天上から金色の鐘の音を降らせてみせるから」と言つて父を説得して「道」を決めたと言いが、その言葉通り、欧州文学の研究として、大きな成果を残した。彼の文学の分野は、独仏語に堪能でなければできないが、近年、永田和子(元追手前高校教諭)氏が、永年の実証的な研究を重ね、数冊の紹介著書が発刊され、真に喜ばしい。加えて私は、高知城近辺に、一片の詩碑でもできないかと、ひそかに夢想している。(郷土史家)

資料受贈報告

寄贈資料から

『田岡嶺雲論集成』
西田 勝著 法政大学出版局刊
2021(令和3)年11月
四六判 268頁
西田勝・平和研究室寄贈



田岡嶺雲「1870〜1912(明治3〜大正元)」は土佐郡石立村(現高知市)生まれの評論家、中国文学者、ジャーナリスト。樋口一葉、泉鏡花の才能をいち早く認めるなど、優れた洞察力を発揮。文学や社会を鋭く見つめ、忌憚なく筆を執った気骨の文筆家です。嶺雲は文芸評論から出発し好評をもって迎えられますが、次第に政治・社会評論や文壇批判に傾斜。日露戦争以降の主だった評論集が次々と発禁になります。主著が後世に多く残らず、ほとんどの文章が漢文読み下し風の古風な文体ということもあってか、嶺雲はいつしか忘れられていきます。そうした嶺雲を発掘し再評価した一人に、西田勝さんがいます。西田さんは大学時代に嶺雲全集の編纂を思い立ち、古書店や図書館に通つて資料を探索。第一回の配本から50年をかけた2019(平成31)年、90歳で『田岡嶺雲全集』全7巻を完結させました。その後も探究心は止まず、評伝執筆などの抱負を述べておられましたが、病でかな

わず、上に掲載の『田岡嶺雲論集成』が遺著となりました。本書には機関誌や新聞他に発表した論考、講演録等に加え新稿1篇を収録。高知市での講演を収めた「田岡嶺雲と幸徳秋水」では、嶺雲の文章は、どれを取っても「一個の詩」「まさに批評を「詩」で書いた人」と評されています。西田さんは取材で嶺雲の魅力を開かれると、この資質を挙げていたといえます。

生前、西田さんには当館展覧会に惜しめない協力をお願いしたくとも、貴重な資料をご寄贈いただきました。寄贈資料の中から、嶺雲直筆草稿や「和訳漢文叢書」等を常設展で公開しています。ぜひご覧ください。

受贈報告

(令和4年2月〜4月)敬称略

- ▼宮尾環「宮尾登美子愛用の文箱他」
- ▼松本ゆり子「高洪虚子短冊他」
- ▼田中全「幸徳秋水漢詩筆墨(レプリカ)他」
- ▼僧成社「中脇初枝「女の子の昔話えほん」日本のおはなしちからもちのおかね」
- ▼中脇初枝再話 伊野孝行絵 僧成社刊他
- ▼細川光洋「吉井井の旅籠 昭和初年の歌行脚ノート 細川光洋著 短歌研究社刊」
- ▼祥伝社「寒月に立つ風の市兵衛式 辻堂魁著 祥伝社刊他」
- ▼大久保辰眞「近代画説30号抜刷 松本竣介街連作における「カメラの眼」 寺田寅彦の映画芸術論を参照軸にして 大久保辰眞著 明治美術学会刊」
- ▼依光ゆかり「歌集 天空林道 依光ゆかり著 砂子屋書房刊」
- ▼吉川泰寛「奈久良久 編者・発行者未詳」
- ▼高知県立大学「文化の思索 高知県立大学文化学部編刊」
- ▼俳人協会「俳人協会二十年史 能村研三編 俳人協会刊他」

高知県窪川町志和（現・四万十町）出身の嶋岡農さんの人と文学を紹介した展覧会「嶋岡農の魅力」肉化された精神」が常設展企画コーナーで始まりました。

今回の展示では、嶋岡さんご夫妻から、思い出深い写真や主宰した雑誌、原稿、絵画など貴重な資料をご提供いただきました。心よりお礼申し上げます。

長年、立正大学教授として、後進の育成に携わって来られた嶋岡さんですが、同時に評論家、小説家、仏文学者、そして、詩人として、90歳になられた今日も現役でご活躍されています。このように、広範囲で仕事をこなされていますが、その根幹にあるのは、

生への限りなき追求であり、文学において核をなしているのは、やはり詩であると云えるでしょう。

洪水企画が出版した「みらいらん 令和3（2021）年 summer 号」には、「特集 嶋岡農」が編まれており、池田康、城戸朱里、村松仁淀、小笠原鳥類といった嶋岡さんの詩を愛する若き詩人たちは、彼の詩に対して「人間愛」、「怒り」、「執念」、「永遠の活火山」、「言語の変身」、「幻想と現実」と

いった言葉を投げかけており、的確に分析をしています。この「みらいらん」は、ミュージアムショップでも販売していますので、是非、手に取ってご覧ください。

今回の展覧会に向けて、嶋岡さんの教え子でもある城戸朱里さんは、

とりわけ興味深いのはフランス文学の翻訳も数多く手がけ、シュルレアリスムを始めとする二十世紀の前衛運動を熟知しているにもかかわらず、その詩は決して方法のためにあるのではなく、抽象的であったり観念的であったりする言葉を避け、平明で力強い言葉をたたみかけていること、そして、生命主義という主題に強靱に貫かれていることである。（中略）八十九歳にして若武者、老いたアナキストは、今でも黒い太陽を掲げて言葉の戦場に立ち続けている。不撓不屈の精神、そして、恐るべき詩魂が、ここにある。とメッセージを送ってくださいました。

また、表題の「肉化された精神」について、嶋岡さんは、
確かな写実的表現に裏打ちされた、

自由な幻想の展開、すなわち、不合理性を不合理のままに受け入れ、詩人の自由な主観的論理を自らが楽しみ表現する。文学（特に詩）の世界における自由自在な自己表現

としており、今回展示している、嶋岡さんの書きおろし原稿「肉（体）化される精神」は、現在も進化し続ける詩人から、読者へのメッセージであり、貴重な資料となっております。

さらに、嶋岡さんは芸術に対しても造詣が深く、特に絵画の腕前はプロ級。多くのファンを魅了し続けています。

今回は「闘う詩人」「愛人たち」「無題」そして、令和4（2022）年3月に、今回の展覧会のために描いてくださった「緑の馬」の4作品を展示しています。

この「緑の馬」は、薄い緑色と淡い黄色をベースに配した、落ち着いた色調の油絵であり、全てを超越した詩人の心象風景が描かれているかのような、とても魅力的な絵画となっております。

少し皮肉屋で、ユーモア溢れる、愛すべき文学者嶋岡農の「自由自在な自己表現」の世界をご堪能いただければ幸いです。

（学芸課長／津田加須子）

展示の様子





「Gardens」展(会期6月12日(日)まで)。展示室には薔薇、水仙、ポピーなど、お馴染みの春の花が沢山登場する物語『秘密の花園』を起点とする世界が広がっています。

庭園の復活とともに孤独だった人たちが明るく変化し、絆を取り戻していく様を描いた物語。私自身もガーデニングをしていると、土の手触り、植物の成長、花の美しさに心身共に健やかに感じるようになります。ガーデニングは最も幸福感を得られる趣味の一つかもしれません。庭を見てくれた人との交流も楽しみの一つです。

期間中ミュージアムショップにもガーデニング本や花の写真集、詩集、雑貨など、手元において時々眺めたくなるような商品も沢山ご用意してお待ちしています。お近くにお越しの際はぜひお立ち寄りください。

(総務事業課／大原良子)



館長エッセイ

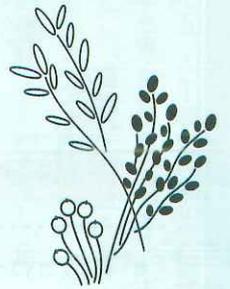
若葉の繁る頃

このエッセイを書いているのは4月の終わり。文学館の館報には相応しくないのかもしれないが、今この時のエッセイで避けて通るのは嘘にも程があるのでお許しいただきたい。

異国では戦争が続いている。終わりの見えない理不尽な攻撃に晒され、大切な人を失い、故郷を追われ、悲嘆にくれる人々の姿や声が胸を刺す。ウクライナの惨状を見るたび怒りや無力感に苛まれ、夥しい不条理な喪失に押しつぶされそうになる。しかし、悲しむことはあっても絶望してはならないと思う。戦争の終結を切に願うが…。

翻って我が文学館前の藤並の木立は瑞々しい若葉が繁り、館内は穏やかな時間が流れている。どちらも現実。彼の地に思いを寄せながら、足元の現実に向き合う日々。

開催中の企画展「花を愛する人の物語」My Secret Garden」は6月12日(日)まで。



両親を亡くし、愛された記憶もない心に傷を負った子供たちが、庭を耕し花を育てることで笑顔を取り戻し健やかに成長していく、現代にも通じる癒しの物語『秘密の花園』がテーマ。他にも、花々を描いた詩や文学作品、絵画やペーパーフラワーアートなどの花咲き誇る展覧会とつながっている。ご覧いただき、ひと時でも心安らげる時間を過ごしていただけたら幸いです。

最後に、今の時期にぴったりの大好きな曲。若葉の繁る頃、君と過ごした楽しい時間に終わりがきたことを悟り、懐かしさにカギをかけて君の知らない道を歩き始めると歌うスピッツの「若葉」のご紹介とともに、心からの感謝の気持ちを込めて、館長エッセイを締めくくります。

明日ありと思う心の徒桜
夜半に嵐の吹かぬものは

(『親鸞上人絵詞伝』より)

(原哲)

初めて文学館を訪れた方、久しぶりに訪ねた方、高知城に来られて、偶然来館された方になにかが残せたらと思います。

学芸課 松岡節子

新職員の紹介

常設展と企画展だけではなく、紙芝居や絵本の読み聞かせ等の活動に携わることを通じて、当館の多様な魅力をお伝えできたら幸いです。

学芸課 佐野仁美

人事異動

退職

道脇 夕加
大西 あゆみ
野々村 昭美

新採

佐野 仁美
松岡 節子

高知県立文学館 カレンダー

開催中

花を愛する人の物語

~ My Secret Garden ~

令和4年(2022) 4/9(土)~6/12(日) 会期中無休
午前9時~午後5時(入館は午後4時30分まで)



会場 高知県立文学館 2階 企画展示室 | 観覧料 500円(常設展含む)
長寿手帳等お持ちの方・高校生以下は無料

関連企画のご案内

●クイズイベント

展示を観ながらクイズを解き、正解数に応じて素敵な景品をプレゼントいたします。

日時 令和4年6月11日(土)、12日(日) 参加費 要当日観覧券
各日とも午前10時~午後4時まで 申込 不要
場所 高知県立文学館 2階 企画展示室 (当日、直接会場までお越しください。)

展覧会の紹介をしています!詳しくは表紙・2ページ目をご覧ください。



臨時休館のお知らせ

6月20日(月)~6月22日(水)
メンテナンスのため休館

次回開催!

おしりたんてい ~ぶんがくかんの ぶんたんじけん~

おしりたんていの魅力的な世界を当館独自のアプローチを加えて
紹介「本と友だちになる楽しさ」をお届けします。

会期 令和4(2022)年7月2日(土)~9月4日(日)
観覧料 500円(常設展含) 長寿手帳等お持ちの方・高校生以下は無料



©Troll/POPLAR

展覧会の紹介をしています!詳しくは3ページ目をご覧ください。

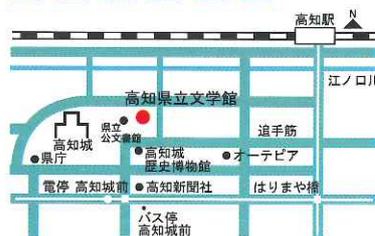
- 新型コロナウイルス感染拡大防止の取り組みにご協力をお願いします。
(マスクの着用・手指のアルコール消毒・適切な距離を保つ等の鑑賞・イベント時のホール入場前の検温など)
- 新型コロナウイルスの感染拡大状況によって、展覧会及びイベントは内容変更または中止となる場合があります。

高知県立文学館で開催する企画展・その他事業は職員全員で消毒・清掃を行い、
安心・安全に利用いただけるよう感染予防・拡大防止対策を行っております。

利用案内

開館時間 午前9時~午後5時(入館は、午後4時半まで)
休館日 年末年始(12月27日~1月1日)を除き、無休。
 ※その他メンテナンス等で臨時休館することもあります。
観覧料 常設展一般370円 企画展はそれぞれ異なります。
 20名以上の団体は2割引。高校生以下無料。
 身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、
 戦傷病手帳又は被爆者健康手帳をお持ちの方とその介護者1名、
 高知県・高知市長寿手帳をお持ちの方は無料です。
 (窓口で手帳等のご提示をお願いする場合があります)
駐車場 なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
附帯設備 ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、
 茶室「慶雲庵」
貸出施設 企画展示室、ホール、茶室
運営 公益財団法人 高知県文化財団

交通のご案内



- 「高知駅前」下車、北へ徒歩5分または
(高知駅行)「北はりまや橋」下車、徒歩20分
高知龍馬空港より空港連絡バス(県庁前行)
- JR高知駅下車、徒歩20分(または連絡バス・路面電車を利用)
- 路面電車「高知駅前」下車、北へ徒歩5分
- バス停「高知駅前」下車、北へ徒歩5分

高知県立 文学館

〒780-0850
高知市丸ノ内1丁目1-20
電話 088-822-0231
FAX 088-871-7857

高知県立文学館 検索

